

## 研究ノート

# 中華民國 80 年の社会

——『少年大頭春的生活週記』の台湾 社会事件編（その4）——

高橋明郎

### 1 はじめに

台湾のベストセラー作家張大春の『少年大頭春的生活週記』は、新聞連載小説として作品が執筆された民國80年（1991）の台湾社会の動きと並行して話が進行していく。それらの事件について、筆者は国家中央図書館所蔵の『聯合報』マイクロフィルムをもとに、内政編（その1，その2）、人物編、社会事件編（その1～その3）をすでに示し解説したが、<sup>(1)</sup>今回は社会事件について続ける。

### 2 学校関連の出来事

#### 2.1 小中学生を巡る諸事件

##### 2.1.1 中学生の親殺し

因不満父親管教嚴格，國中生楊××凶性大發，逆倫弑父。

81. 3. 22～81. 3. 28 《鬥牛小英雄》重要新聞（P. 129）

これは新竹市成徳國中の2年生が、父親の厳しい躰に反発し11月25日夜ナイフで

(1) 「中華民國80年の社会——『少年大頭春的生活週記』の台湾 内政篇1」（2001年3月 香川大学経済論叢73巻4号）、「同内政編2」（2006年3月 香川大学経済論叢78巻4号）、「同人物編」（2003年3月 香川大学経済論叢75巻4号）、「同社会事件編1」（2002年3月 香川大学経済論叢74巻4号）、「同社会事件編2」（2004年3月 香川大学経済論叢76巻4号）、「同社会事件編3」（2005年3月 香川大学経済論叢77巻4号）

父親楊文生（45）を43回も斬りつけ、少年は26日殺人容疑で少年法廷に送られたというものである。

『聯合報』記事によれば、11月25日夜10時16分、新竹市警察局第一分局が、少年から、新竹市経國路2段620巷4弄14号で殺人事件があり、警官の派遣を求める旨通報を受けた。警察が急行すると、楊文生（45）に重傷を負わせた通報者の少年を発見した。楊文生は妻によってこれよりさき省立新竹醫院に担ぎ込まれたが、夜11時5分死亡した。

少年の供述では、父親の躰が厳しすぎることをかねてから恨みに思い、その殺害を準備していたが、最近になって父親が、彼が飲もうとしていた酸辣湯<sup>(2)</sup>を飲んでしまい、このため殺害決行を決めた。25日夜、父にまた叱られた少年は、気合い付けに酒を少し飲んだあと、父が自宅で経営している木型工場へ走り作業用ナイフを取ると続けざまに43回斬りつけた後、客間のソファに腰を下ろして警察に電話したということであった。少年は衝動的に父を殺害したことを深く後悔していると報じられた。

少年の成績は中の上くらいで、陸上競技に幾分関心があり2回入賞経験がある。少年の部屋には洛基（ロッキー）や成龍らスターの写真が貼ってあった。

蔡瑞宗検察官による検視結果は、43回斬りつけられての出血多量による失血死で、心臓と肝臓に達した二つが致命傷となったものとする。検察当局は事件の重大性に鑑み重い量刑を求めた。

記事には母親の鄭梅鶯（40）の発言も引かれているが、それによれば、夫の楊文生は、子供に立派な心を常に要求し、子供の教育には少し厳しかったが、まさか息子が突然実の父を殺害するとは思ってもよらないということである。

一方少年の通う中学の王一平校長のコメントも取られている。校長によれば、少年は学校では問題のない子で、スポーツに比較的興味を持っていた。性格は割にぶっき

---

(2) 極めて一般的なスープで、鍋貼や水餃とともに取ったりすることが多い。

らぼうだが、クラス委員長になったこともある。しかし陸上部に入った為にレクレーション係（康楽股長）に代わった。

姉は成徳中卒業後名門省立新竹女中に入学したほど成績が良かった。王校長は更に、兄の楊澤東が死んだ後は、兄弟で一番年上の男子となったため、おそらく父親の期待が強くなり、それが今回の事件を生んだのではという見解も示した。

この事件は、それ自体もセンセーショナルながら、別のワイドショー的興味からも関心を集めた。この一家は当時立て続けに不幸に見まわられていたのである。兄の楊澤東は2年前の民國78（1989）年にMTV（カラオケ店）で殺害され、遺体は青草湖に遺棄された。姉の楊嘉華は更にその2年前の民國76年（1987）海水浴場で溺死していた。また祖母は前年に病気で死亡していて、一家には少年以外は両親と姉一人、弟一人であった。

少年による所謂尊属殺人は、それなりの反響を呼んだ。毛高文教育部長（文部科学大臣に相当）は、学生による殺人が幾つか起こっていることについて、教育が知育偏重で倫理を軽視した結果として、学生に一時的に理性を失わせているとし、非常に遺憾であるとコメントした。この感覚は、後に引く郝柏村行政院長（首相）の認識とも一致し、当時の社会一般の見方を代表していると言える。

また次の教育部長のコメントは、いかにも儒教圏の国らしいものである。即ち、毛教育部長は、孝は教育の重要な一環であり、学生がこの観念を欠いて父を手に掛けるというのは教育の失敗である、としたのである。教育部長は続けて、しかしながらこれは一事件に過ぎず、すべての生徒が倫理に欠けると考えるべきではないとも強調した。また、彼はこの事件の情報収集を指示し、補導教材を作り積極的に正常な教育を進めれば、この種の事件の発生する可能性を低減できると述べた。

この事件を伝える新聞も「國中生逆倫弑父，連刺43刀奪命（中学生，道德に反し父を殺害，43回連続で刺して命を奪う）」という大見出しを掲げ、そこに「哥哥被殺棄屍，姊姊游泳溺斃，祖母因病去世，悲劇没完没了（兄は殺され死体遺棄，姉は遊泳中溺死，祖母は病気で死去，悲劇は終わらず）」「不満爸爸管教嚴，喝了他的酸辣湯，養育之恩渾不記，十四歲少年行凶（父の管理が厳しく，自分の酸辣湯を飲まれて逆上，

育ての恩はすっかり忘れて十四歳の少年凶行に及ぶ)」と小見出しを付けるほか、教育部長の反応を報じる部分にも、「孝字怎寫，老師沒教？(孝という字をどう書くか，教師は教えなかったのか)」というキャプションを付けている。

### 2.1.2 教師による猥褻事件

今年師鐸獎得主遭一名家長指控非禮女學生。

80.9.1～80.9.7 《又要開始說謊話》重要新聞 (P.37)

民國80年に特に優れた教師に与えられる「師鐸獎」を受賞した高雄縣の林という小学校教師が、9月4日、女子児童に猥褻な行為をしたとして、張という保護者から訴えられた。しかし教師自身は容疑を頑として認めず、校長や二十数名の保護者も冤罪だとしている。一方余陳月瑛高雄縣長は既に当該教師の異動の処置を指示し、また「師鐸獎」も取り消しとなったというのが概要である。

保護者の張氏は9月4日午前に親友数名の付き添いで高雄縣政府縣長室を訪れ、余陳縣長に林教諭が娘に何度も猥褻な行為をしたと訴えた。その場に女子児童本人も同席し、林教諭が彼女の「私處」を触ったと述べた。縣長は激怒し、直ちに林教諭と校長、鄭松炎縣教育局長、陳瑞忠主任督学らと協議した。

張氏の主張は、林教諭が娘の担任になって以来しばしば娘に猥褻な行為を働き、また夜間いつも娘に電話をかけてくる。6月18日夜、娘は林教諭の電話を受けた後真っ青になったので、不審に思って問いただすと、娘が何度も猥褻な行為をされていただけでなく、このことを言いふらすなど脅され非常に怖がっていることが分かったという。

一方林教諭は、この女子児童が授業中いつも足を通路に投げ出しているので、一度足を手で机の下に押しやったところ、この女子が帰宅後家族に下半身を触られたと伝えたために保護者の誤解を生んだのだと説明した。校長も、林教諭がそのようなことをする人物ではないと表明し、教諭を弁護した。しかし余陳縣長は信用せず、直ちに

鄭教育局長に林教諭の転任を指示するとともに、師鐸獎の資格も取り消したので、保護者もこの措置に満足して引き上げた。

しかし対応は二転三転する。間もなく、二十数名の保護者が連れ立って縣長室を訪れ、縣長に、林教諭は普段から授業熱心で態度も良く、立派な教員であると述べて、処分の再考を求めた。そこで余陳縣長は教育局に調査を命じ、真相を明らかにした後処分を決めることに方針を変更した。しかし結局午後になって、教育局長は、台北市で会議中の縣長から、二度電話を受け、転任と師鐸獎取り消しの決済を直ちにするように命ぜられた。

鄭松炎縣教育局長は、「余陳縣長の電話での口振りは相当不快感を持っている様子で、彼女も一人の母親の立場で保護者の苦しみは理解できる。もしこれが誣告であったとして、保護者が娘の名誉も配慮せずにスキャンダルを捏造することはありえないという考えを示したと表明、加えて、関係当局が夏休み前に既にこの件を知りながら、督学の謝勇健の調査後、林教諭が児童の腰掛ける姿勢が悪いのを直そうとしたことが誤解を生んだもので猥褻の事実はなかったとしていた。鄭局長は、これは法による処理を待つべきで、真相が明らかになって（「水落石出」）から処分を決定するのが適当であると述べた。しかしもし彼が縣長の指示する処分にサインしなければ縣長自らが処分を下すだろうという懸念を示した。

この林教諭は校内に児童文学実験班を作り、多くの小詩人や小作家を育て、その功績で今年教育局から「特（殊）優（良）教師」に選ばれ師鐸獎を受けた。過去数年学校側が師鐸獎応募を勧めていたが、本人が拒んでいたという。

師鐸獎は、毎年優秀な教師を選出表彰するもので、校内で被推薦者を選び、審査を経て授与される。受賞応募要件は、基本的に縣市で決められる。通常賞金（例えば最近なら五千元程度）と数日の休暇が得られるが、むしろ名誉を得られるという点为主である。

### 2.1.3 林曉芳誘拐事件

台中市警方在南投國姓鄉捕獲綁架國中女生林曉芳的嫌犯廖金玉。

81. 2. 9 ~ 81. 2. 15 《快樂的照片》重要新聞 (P.103)

台中市の光明國中學生林曉芳が廖という兄弟に誘拐されたのは民國81年(1992)の1月末のことであるが、事件が解決に動き出す2月中旬の模様を、『聯合報』の記事をもとに、経時的に組み立てる。

2月9日廖金玉三兄弟は台中縣警に電話をし、林曉芳は無事であると伝えてきて、台中市警捜査本部(專案小組)はこの情報の信憑性を調べた。

電話の主は廖家の兄弟の友人を名乗る女性で、9日の夜10時近くに台中縣のある警察分局の勤務指令センターに電話をかけてきた。それによると、廖金玉三兄弟と林曉芳は現在台中市内に隠れている、林曉芳は無事であり、警察から林家に無事だから心配するなと伝えて欲しいと述べた。この電話によると、廖氏兄弟の気持ちは揺れていて自首すべきかどうかひどく悩んでいる。警察は電話をかけている場所を尋ねようとしたところ、この女性は直ちに電話を切った。

捜査本部はこの情報には懐疑的だったが、期待は高まった。警察は、犯人が林曉芳を解放し、進んで自首すれば、裁判官も量刑で考慮するだろうし、犯人も更生のチャンスが得られるとマスコミを通じて表明している。

一方誘拐された林曉芳の家族はこの日まで数日台湾中部の有名な寺社を回って娘の安全を祈り、当然ながら犯人らが早く良心に目覚めて娘を解放してくれるよう切望していた。

取材は容疑者の父親にも向けられた。

逃亡中の廖金玉兄弟の父親、廖延福は、この時既に還暦を過ぎていたが、台中で子供達が林曉芳を誘拐して巨額の身代金を要求しながら人質を放さないと聞いて、娘を誘拐された林家に詫びつらい日々を送っていたが、8日に姿を見せ、子供達と連絡が取れば彼らが自首することを勧めたいと述べていたが実現しなかった。父親は、9

日、子供の頃非常に人に好かれていた四人兄弟がなぜ誘拐事件を起こして人様の家族の心を傷つけたのか理解できないと述べ、息子の廖金玉らに対し、自分の娘を誘拐されたらどんな気分か考えて、直ちに釈放してこれ以上過ちを重ねず、父の自分が世間に顔向けできないようにはしてくれるなど訴えた。

このようにマスコミの前で関係者が犯人に訴えるのは、台湾のメディアでは常に見られたことであり、映画『熱帯魚』の報道姿勢は架空のものではない。

彼は息子達について、かつて苗栗から國姓郷に越してきて山地を開拓して果樹を栽培していたが、生活が苦しくて彼らを育て上げられなかった。彼らが起業するのを見ていたが、彼らが人としての道を外れないように普段からたたきこむことはしなかった。彼らが一人前になり（「羽毛豊満」）金を稼いでも、親は養おうとせず、そのため彼自身も果樹園を息子に残すつもりはなかった、と当時語っている。

2月11日、新聞各紙は犯人が花蓮からの逃亡を計画と報じた。

台中発の記事は、捜査本部が、廖金玉、廖金田、廖金財の3犯人が花蓮港から船で密出国しようとしているという事を信頼できる情報として得ており、大部隊を出動させ花蓮縣警と合同で追跡する、とした。

この時までに捜査本部には多くの情報が寄せられたが、1月31日の事件発生後集めた資料を照らし合わせ、廖金玉兄弟が密かに花蓮に逃れ密出国を準備しているという情報は確度が高いと判断した。というのも廖金玉は以前花蓮の貨物会社の運転手をしていたことがあり、地縁が相当有るからである。

10日未明3時頃、南投縣の者と名乗る男が台中市警五分局刑事組に電話を寄越し、8日午後1時頃南投縣の山間部に通じる道路で、廖金玉らと林曉芳が白のバンに乗って進んでいくのを目撃したと伝えた。この電話は捜査本部が既に得ていた、犯人達が花蓮方面に逃走という情報とも合致した。

しかし、この時点では、捜査本部は廖兄弟を台北や高雄で見たという情報も得ていて、油断せずに人員を派遣して捜査させてもいる。

林曉芳の家族の焦りはいよいよ募り、廖兄弟が瀬戸際で思いとどまり（「懸崖勒馬」）改心する（「回頭是岸」）よう願うばかりである。

また同日の花蓮発の記事は、廖氏兄弟が中部横貫公路（以下「中横公路」）の支線である合歡山道路を南投縣山間部に向かっているとの目撃情報があるとの情報を得て、目的地と見られる花蓮での準備状況を報じている。

花蓮縣警は逮捕の準備をし、中横公路の東段出口で検問を行ったが、10日夜までには発見できなかった。検問地は大禹嶺出口と太魯閣で、ゲートを設置して通過車両の検問を行った。

捜査本部は、また10日に車両ナンバー 572-7422 のフォードの千里馬(3)自小客車で逃走しているものとして、警察局の八号分機を通じ全国に手配した。

ここまで膠着状態だった事件だったが、2月12日の各紙は、犯人達が自首をほめかし、林曉芳が解放される望みがあると報じた。

これは11日夜に逃亡中の犯人が約束通りわざわざ南部に向かった台中縣霧峰郷の原帥電機会社の張茂雄理事長と電話で話し、深夜自首することが決まり、未明にも出頭、人質も同時に解放されるとの観測が報じられた。容疑者の廖兄弟は張茂雄が理事長を務める原帥電機会社の請負をしたことがあり、彼を「老頭家」として自首しようとしたということがあり、報道締め切りの関係で12日朝刊に出てしまったものである。

廖家は四人兄弟だが、11日夕刻、一人だけ犯行に関与しなかった廖金貴が張茂雄に、犯人兄弟と林曉芳が現在高雄に潜伏していて、理事長の都合が良ければ彼らを引き取りに行きたいと伝えてきた。張理事長は直ちに応諾し、いつでも連絡が取れるようにしておく約束、彼の自動車電話の番号を教えた。

犯人兄弟は更に、張茂雄が車を運転して南下し彼らと合流すること、ただし警察には知らせないことを求めた。張茂雄はこれに同意したが、霧峰警察に自首するのに霧峰警察に知らせないわけにはいかないとした。

張茂雄は万一犯人兄弟と林曉芳を乗せて霧峰に向かう途中他の警察に捕まると、兄

---

(3) 千里馬はヨーロッパ・フォード（福特）車で、台湾では1970年代後半に売られ、超高級車として特にその筋の人たちに人気が高かった。販売期間はそう長くなかったので、この誘拐時点では相当に古い車種である。

弟が自首の途中といっても信用されないだろうと心配し、霧峰分局の人間に密かについてこさせることとした。分局でも張茂雄の意見を尊重し、兄弟の自首という誠意も信用して、張茂雄に全権を委任して自首に向けて表に出ないようにした。

11 日夜張茂雄はバンを運転して廖金貴を拾い南下した。夜 10 時に、張茂雄は霧峰分局の陳建煌刑事組長らとともに高雄に到着、犯人らの疑いを避けるべく陳組長と分かれて、張理事長だけが屏東に向かった。そして犯人兄弟とその親友が自首の段取りを相談した。当時南部は雨がひどく、高雄に深夜入りそこから旗山方向に車を進めた。そこで迎えの者がいて、廖氏兄弟と電話連絡が取れた。

張茂雄は 11 日夜 11 時から廖金貴と断続的に連絡を取り、電話で逃亡中の三兄弟と話した。張茂雄の言うところでは、廖金貴は親友を通じて残りの兄弟と連絡を取っており、廖金貴にも彼ら犯人がどこにいるかは分からないと称した。

張茂雄は兄弟と電話連絡を続けていたが、兄弟 3 人の意見がまとまらないことに苦慮していた。張茂雄は犯人に、この老人が来た以上、決して彼らを失望させない。自首の件は既に霧峰分局と話がつけてあり、彼自身が台中縣警霧峰分會の主任でもあり、警察との橋渡しを保証し、裏切らないと伝えた。張茂雄は犯人兄弟に、大義を諭し、自首だけが生き延びるチャンスで、誤りを断ち切れると説得した。

11 時 30 分、ついに犯人兄弟の意見がまとまり、人質林曉芳を連れて自首することになった。しかし、廖家の三兄弟は、山中にいるので下山に 1 時間かかると言っており、12 日 0 時 30 分段階で犯人との接触はできていなかった。従って朝刊は、釈放の望みとしか書けなかったのである。

しかしながら、事件は記事の観測とは別に更に迷走した。

一旦は出頭して自首するとしていた廖三兄弟は結局張茂雄の前に現れ自首することはなかった。

明け方 3 時 20 分まで断続的に話しあい、相手は自首に同意し、旗楠公路で待っていて欲しいと伝えてきた。張茂雄は 6 時までまったが、犯人らは結局安全ではないという口実で自首はしなかった。この時点まで張茂雄は、これが唯一のいい解決法だと犯人達を説得した。自分は台中縣警友協會霧峰分局主任で、警察関係者にも顔が利く

ので、自分と出頭し自首すれば有利であると言ったが、信用されなかった。

一方の林家では、この日にも解放かとの知らせに両親は喜び、どうやって娘を迎えるか計画していたが、これもぬか喜びに終わった。

林曉芳が1月31日に誘拐されてからこの日で13日たっており、この間父親林崑弘と継母の蔡瓊紫は涙を流しながら神頼みに歩いていた。しかし十日以上消息が無く夫妻は眠れず体もやつれてきたと報じられた。

11日夜11時頃、廖家兄弟がすぐにも自首するかのような情報を得、家中大喜びだった。しかし林崑弘は警察からの情報ではないことから半信半疑であった。深夜12時になって台中市警から電話があり、林崑弘に警察に来て対面の準備をするよう言ってきた。夫妻の不安は一掃され、林崑弘はすぐに警察へ行き吉報を待った。一方蔡瓊紫は娘にすぐにも会いたかったが、家に世話しなければならない子供がいたし、また電話がひっきりなしにかかって、その対応もせねばならず、家で知らせを待つことになった。

娘が解放されるかも知れないという知らせに、蔡瓊紫はすぐ各地の親友達に電話で伝えた。除夜に作った、娘のお年玉がまだ寝室に置いたままなのを思い出し、もうすぐこれを林曉芳に渡せると言っていた。また、娘は誘拐されて運気が悪くなっているから、夜が明けたら豚足ソバ（猪脚麵線）を買ってきて娘に煮て食べさせ厄落とししたいと述べていた。

夜中の2時30分、親友数名が林家を訪問、林曉芳がまだ帰ってこないのは、おそらく警察で調書を取られているからだろうと話していた。蔡瓊紫はじっとしておられず、警察に電話し早く娘を休ませて、それから調書を取って欲しいと頼もうとしたが、親友が押しとどめたので、電話はしなかった。3時に電話があり、蔡瓊紫はそれを受けた後、娘はまもなく台中に来るだろうと思うと待ちきれなくなって、親友達と台中市警察局に行き、夫の林崑弘とともに娘の帰りを待つことにした。

しかし待てど暮らせど娘は見えず、二人は非常に焦り、そのまま7時になってようやく廖氏兄弟の変心を知った。その後は刑警隊長室で呆然と立ちつくすばかりで、この事実を受け入れがたかったが、やむなくがっかりしてこの場を去った。

12 日蔡瓊紫は再度焼香して無事帰還を祈願した。

13 日、捜査本部は廖氏兄弟は南部にはおらず、國姓郷もしくは同じ南投縣の埔里の山中にいるものと見て、ここに百名を超す警官を投入した。これは同日午後 2 時過ぎに國姓郷の住民から、犯人と見られる二人がえんこした車に乗っており、蕙蓀農場付近の産業道路で一人が車の修理をしているという通報を受けてのものである。陳太柱台中市警察副局長は直ちに刑警隊の鄭甘松隊長と二十数名の警官を率いて逮捕に向かった。現場に向かう途中鄭隊長は携帯電話で南投の警官らを合流させようとしたが、山中で電波状況が悪く成功しなかった。

1 時間後一行は蕙蓀農場に到着したが、付近の地理に疎く、大雨も降っていて、1 時間近くも付近を搜索し、ようやく 5 時頃にナンバープレートの無い車を修理している廖家兄弟を発見、廖金玉と廖金田と認め、逮捕に移った。兄弟は直ちに逃走、警察は空に発砲すると廖金玉はピストルを取り出し抵抗しようとした。警察はこのため廖金玉の足に発砲、そのうち一発が右太股に命中し、廖金玉が倒れたところを逮捕した。廖金玉は改造した玩具の拳銃と弾 11 発を持っていた。一方廖金田は草むらから付近の森に逃走、警察は付近の警官の応援も求め絨毯式に搜索しているが、この日夜までに発見されなかった。

廖金玉は救急に送られたが、命に別状はなかった。廖金玉はこの時点で、林曉芳と廖金財は友人であって、皆で遊びに行っていただけで、誘拐ではなく、彼女は今廖金財と一緒に高雄にいると述べている。しかし林曉芳の家族はこの話を否定、警察も信じておらず、廖金田と廖金財の二人は南投の山間部に潜んでいると見て徹夜で搜索した。

14 日未明に廖兄弟は友人を通じて林家に電話で林曉芳を解放すると連絡した。9 時 30 分林曉芳は張茂雄の家に電話し、家に戻りたいと伝えた。続いて廖金財が、11 時に張茂雄に南投縣草屯鎮の台湾客運のバス停まで来て、赤いコートを着た林曉芳を引き取るよう求めた。

11 時頃張茂雄は草屯で林曉芳を発見、自宅に連れ帰り昼食を取らせた。

午後 1 時 10 分、張茂雄は南投縣霧嶺分局の陳建煌刑事組長に連絡、張氏の夫人で

ある黄玉鶴が刑事組まで林曉芳を連れて行った。午後3時10分林曉芳は台中市警察局第5分局に移送された。頭から赤いコートを被った林曉芳は野次馬が自分の名前を呼ぶのを聞き、こらえきれず号泣した。

林曉芳の父親林崑弘は継母の蔡瓊紫と両脇から娘を抱きかかえた。

黄玉鶴は、林曉芳が、廖金財とは知り合って既に半年になり、1月31日は気分がむしゃくしゃしていて廖金財と遊びに出かけることにしたと述べ、警官の一人も林曉芳は廖金財を知っていると知っているとしている。

しかし午後5時に台中地検の涂達人検察官が事情聴取した時は、林曉芳は泣き続けており、すこし落ち着いたところで、検察官がいつ、誰に誘拐されたか聞くと、誰も傷つけないと言って泣き崩れた。

彼女の供述では、1月31日午前6時30分、彼女は廖家の一人に首をつかまれ、別の一人が足を持って車に押し込め、布で彼女に目隠ししたあと、彼女を山間部に乗せていった。彼女はこの2週間ほとんど山間部の工場寮ですごしていた。

廖家兄弟は彼女に対しては乱暴ではなく、縛り上げることもなかった。そして林曉芳の父との話がつき次第すぐ家に帰すと言っていた。14日午前、兄弟が彼女を解放する時、別れ際に帰ったらよく勉強しろ、自分たち兄弟の命はお前にかかっているのによく考えてくれ、と言われた。

彼女が廖金財と顔見知りで進んで一緒に遊びに言ったという供述については、張茂雄夫妻が、こう言えば犯人達は助かると頼んだからだと述べた。しかし張夫妻は、そのように教唆したことはないと堅く否認した。事情聴取後、検察は林曉芳を直ちに帰宅させ、逃亡中の犯人廖金田、廖金財を全力で追った。

埔里分局では夕刻通報を受けてから周道明分局長が直ちに北山・長流・長壽・合成などの派出所の警官を集め、六ルートで路上検問を実施、合わせて國姓・梅林派出所には民防・義警に動員をかけ、陳志鏈刑事組長が指揮して梅子林地区を搜索した。

14日夜國姓郷山間部は雨で、捜査員は雨具・雨靴を着け懐中電灯と警棒を持って山に搜索に入ったが発見できなかった。警察は廖金田が埔里鎮の梅子林もしくは合成山で逃亡中とみて、捜査の重点をこの地区の工寮に置いた。

一方逮捕された廖金玉は、林曉芳は自分で彼ら兄弟について逃亡し、父親から身代金を取ろうとしたのだと供述した。廖金玉は省立台中醫院救急に送られた後訊問が行われたが、その際彼は、林曉芳と弟廖金財は知り合って半年になり、兄弟は今回彼女と約束して遊びに出たが金が足りなくなって林曉芳の父親から金を脅し取る算段をしたとしている。逮捕当時車を修理していたのは友人で、二人の弟廖金田と廖金財は高雄にいるという。しかし陳太忠台中市警副局長は、警察が得ている情報では逃亡中の弟と人質は南投縣にいたのであり、前日廖金玉と一緒にいたのは廖金田だと反論した。廖金玉は友人を持ち出して二人の弟を庇おうとした。

陳副局長は、廖金玉の証言から、彼は非常に狡猾で話を捏造して捜査を攪乱しようとしているのだという見解を示した。

このように廖金玉は林曉芳も加わった狂言だと供述したので、林曉芳の家族は猛反発<sup>(4)</sup>した。

継母の蔡瓊紫も、廖金玉の証言は信じられないと語る。林曉芳にはもともとボーイフレンドはおらず、毎日の登下校にもおかしい所はなかったし、成績も良く、教師も

---

(4) 『聯合報』の林榮記者による林崑弘のインタビューは次の通りである。

記者) 廖金玉は警察の調べに、林曉芳は逃亡中の廖金財と半年前からつきあっていると  
言っていますが。

林 ) 嘘八百です。林曉芳は廖家の兄弟を知っていたはずはありません。

記者) 林曉芳は自分から廖家兄弟と協力して父から金を脅し取ろうとしたのだと述べて  
います。

林 ) あり得ません。彼は罪を逃れようとしてそう言っているのです。

記者) これは誘拐だと思われませんか。

林 ) 勿論誘拐事件です。というのも林曉芳は誘拐された先月 31 日学校で試験を受け  
る予定で、その朝も試験の心配をしていて、家出するというような気配は有りませ  
んでした。

記者) 林曉芳は誘拐後家に戻ると電話してきていたようですが、落ち着いた様子でした  
か。

林 ) 2 回かけてきました。声は落ち着きがなかったですが、これは仕方のないことで  
しょう。

記者) 廖金玉は、娘さんと廖金財は無事に高雄にいると言っていますが、どう思われま  
すか。

林 ) もし事実で、娘が無事であるなら喜ばしいことです。娘が早く戻るよう望んでい  
ますし、廖金財が早く娘を解放してくれるよう望みます。

同級生も彼女を重んじていた。たまに男子の同級生が家に遊びに来るときは、いつも事前に両親に知らせており、廖家の兄弟を知っていたはずがないというのである。蔡瓊紫は、林曉芳は実子では無いけれどもこれまで自分の子のように育て、二人の仲も良く、一家もこれまで睦まじく過ごして来たので、当てもなく家を出る筈はなく、誘拐されたのだとした。

なお、この日の『聯合報』は、林曉芳誘拐事件のすぐ下に、既に紹介した<sup>(5)</sup>、父殺しの張秉源の死刑が確定したという記事が出ている。

## 2.2 教育と犯罪

ここに紹介したのは、学生の犯罪、教師の犯罪、そして学生の誘拐被害である。

第一は犯罪の低年齢化で、国民全体への監視機構の崩壊過程で、青少年非行への監視も例外ではなく穴が見えるようになっていた。この点については、また稿を改めて触れたい。

第二の教師の問題。この頃から、教員の社会的地位の低下が開始する。背景の一つは、勿論第一で述べたように、青少年の非行化に拍車がかかり、日本でも見られたような教師に対する校内暴力、特に卒業式前の無軌道な行為が多発、これによって教師が受け身に回ることが多くなったことがある。嘗て進学指導のため公然と行われてきた体罰、そして学校が進学の為に行ってきた行き過ぎた補習などにブレーキがかけられつつあった。人権運動など市民運動の高まりと同時に、次第に進学競争が緩和しつつあったからで、以前のような教育のための教員と父兄の固い共犯関係が薄れ、教師と保護者の齟齬が表面化しだした。厳しい指導は、生徒を甘やかす父兄の増加で、しばしば摩擦の種と化していった。加えて、台湾の経済的発展は児童生徒の家庭の経済環境を大きく向上させ、教師は経済的にも恵まれない職業に転落した。丁度、昭和40年くらいまでの日本で、次第に大卒の優秀な人材が企業に流れ教員が見向きもされなくなった時、或いは改革解放で周囲の給与が急上昇する中給与を据え置かれた教員の人気急落して、師範大学が学生集めに困るような時期の大陸と同様のことが台

(5) 「社会事件篇1」(香川大学経済論叢 74 卷 4 号)

湾でも起こりつつあった。

嘗てなら保護者との関係で問題にならなかった、もしくは表沙汰に出来なかったようなことが、緊張状態の教員と保護者の下では告発騒ぎに及ぶ。

意気下がる教員たちに、聖職の誇りを高めさせるような師鐸獎であったかどうか。各地の教育局、ひいては教育部の肝いりの選考だが、実はこの賞の受賞を履歴に示す人が少なくないように、本当に厳選された賞かどうかは疑問が残るところである。特に嘗ては校長が推薦の大権を握っていて、現在のように父兄の意見が参考とされるようなこともなく、ましてや児童・生徒の感覚を取り入れたものでもない。この重要新聞で、猥褻事件を紹介したあと、大頭春は、自分の小学校時代の音楽教師林美枝が体罰を加える教師だったのに師鐸獎受賞者だったと回想するが、仮にそういう教師でも、例えば音楽コンクールなどの実践で実績があれば、推薦されて然るべきだったのである。

第三に、何回か前稿でも触れたように、治安の悪化があり、特に誘拐は成人相手ですら極めてポピュラーな犯罪だった。誘拐を恐れる余り金持ちがそれらしい高級車に乗ることは憚るようになったのもこの頃のこと、廖家の犯人達が年代落ちとはいえ高級車「千里馬」に乗っていたのは何とも皮肉なことである。成人にしてこの有り様であるから、父兄は子供の誘拐に極めて神経質だった。子供は学校まで送って行き、共働きなら日本の鍵っ子のように一人で帰宅させず、学童保育のような施設に預け、親や親族が引き取りに行く。おかげで、今日でも都市部で一人で登下校する児童を見ることはあまりない。

郝柏村行政院長は民國 78 (1989) 年 9 月 8 日、「對全國治安會議分組討論總結報告之指示」の中で、その第 4 項に「對“防制青少年犯罪教育輔導工作”方面」としてこの問題を取り上げている。<sup>(6)</sup>

そこで指示されているのは、おおむね

- 1) 青少年犯罪は全国の犯罪の 25% に達しているが、教育輔導によって低下させることが可能で、どういう教育輔導をするかが喫緊の課題である。

(6) 郝柏村『不懼』五四書店、民國 84、台北所収

- 2) 小中学校での教育成果が青少年犯罪と密接に関連するので専門家の提案を仰ぎ、政府としては即時実行できるようにする。
- 3) 青少年の教育輔導は、学校の担任と生徒指導部の責任である。特に担任の指導は進学重視、道徳軽視の傾向があり問題である。特に中学の生徒指導教師は3年間は変更しないことが望ましく、かわりに相応の待遇をすべきである。
- 4) 担任、生徒指導教師と家庭の連携が重要である。電話が普及し、教員が必ずしもわざわざ家庭訪問しなくても良いのだから、情報をこまめに集め、また父兄にも学校での状況を伝えて少年達が学習に専念できるようにすべきである。
- 5) 浪人は、卒業校が指導責任を負うと同時に政府も職業訓練などを行う。軍も浪人や失業青年を18歳から前倒して徴兵入営させることに同意している。
- 6) 校長や教師の責任制度を確立する。問題少年の発生は必ずしも学校だけの責任ではないが、学校が責任の一端を逃れることは出来ない。各校の問題少年を統計調査し校長や担任の評価に結びつけると同時に、学校の青少年犯罪に対する責任制を確立する。

というものである。一部は抽象的であるものの、制度として相当過激な提案をも含んでおり、政府当局が青少年犯罪にかなりの危機感を持っていたのが分かる。

### 3 台湾大学学長の辞任騒ぎ

郝院長罵孫校長，後來又有道歉。

80.10.20~80.10.26 《掃把班》重要新聞 (P.59)

これは小説でこうもあっさり触れられると大した事には見えないが、実際は社会的に関心を引いた事件である。なぜなら「孫校長」とは、当時の孫震台湾大学学長だったからである。日本の旧帝大の一つ台北帝大を接收した台湾大学は、戦後今日まで台湾で第一の国立大学であり、その学長ともなれば権力も識見も業績も随一のものであ

る。その学長が公式に非難されたとなればやはり由々しき事態であり、10月23日付け『聯合報』も「“不滿意”“不原諒” 郝院長公開重責孫震（“不滿意”“許し難い” 郝柏村首相公式に孫震を非難）」という大見出しに、「校園負責人不應讓大多数非学校人員假校園做不法行動的庇護…（学園の責任者は多数の学外者に校地を不法行為の保護に使わせるべきではない）」「支持警方驅離 100 聯盟的行動（警備当局が 100 聯盟を排除した行為を支持する）」「警方找不到他，他高高在上（警備当局は学長を捜し出せず，学長は高見の見物だった）」という首相の非難の言葉を副題に、「郝柏村院長認為昨日的答詢，是還警方清白的好機會」「散會後，毛高文特別手動與院長溝通，兩人臉色頗凝重」というキャプションも付け、かなり大きく扱っている。

### 3.1.1 立法院での非難

郝柏村柏村行政院長は10月22日、100聯盟を排除した警備を支持すると表明した上で、当時大学責任者が責任を果たしていなかったことは大いに不満だし、この真相が歪曲されているのは尚更許し難いと述べた。郝柏村院長は立法院の答弁で、「もし責任感ある学長なら、当日は現場にいて状況の変化に注意しているはずだ」「警備部隊が突入したとき学長を捜したがつかまらず、高見の見物を決め込んでいたのだろう」と発言、あわてて教育部長（文部科学相）の毛高文が議会終了後に院長と会談する騒ぎになった。

王滔夫立法委員は22日の審議で、100聯盟の反閱兵行動は支持しないが、大学の自治というものがあり、軍隊や警察が踏み込むべきではないと質した。これに対し郝柏村院長は、質問者には事実誤認があると反論した。郝柏村によれば、100聯盟の反閱兵は、多くの国民に顔をしかめさせている。政府としては校内の安定と学問の自由を最大限尊重するが、ある国の学校が独立自主の治外法権となるわけではないとした上で、警察もみだりに学内に入るべきではないが、大学責任者も多くの学外者に校地を開放して不法行為の隠れ場所にしてはならない」とした。彼の表現を借りれば、この責任者は責任を放棄している、警察が学内に入るとするのは、大局の為、また李鎮源らを保護するためである。自分は李鎮源とは知り合いではないが、その身の安全には非常に関心がある。というのも李鎮源は学会で相当の地位にある人物だからだ。台

湾大学に進入したのは、大学の教官でも学生でもない与太者、破壊分子である、もし李鎮源らが害を受けたら誰が責任を取るのか、というのである。

更に郝柏村院長は、「執行吏には、もし警察が学内に入る場合は先に大学当局に知らせよと指示していた。しかるに当日大学は夜中の2時3時まで騒いでいる者がいたにもかかわらず、責任者たる学長がつかまらなかった。責任感がある学長なら現場で常に情勢の変化を注視しているべきなのに、警察が彼を捜してもつかまらず、高見の見物をしていた」と述べた。そして興奮した調子で、学長が校内の安全を守れないにもかかわらず警察も導入しないというのであれば、この学校責任者は職責を果たしていないのではないかとつなげた。

彼は警察の行動は国慶閱兵式を無事行うためのものである以上警察を完全に支持する。本来学長を非難したくはないが、真相が歪曲されるのは我慢ができないので、前日の王滔夫立法委員の質問の機会に考えを述べ、警察の汚名を晴らすいい機会だったとした。

### 3.1.2 各方面の反応

これは台湾トップの大学への政治介入とも取れる出来事だったが、他大学の学長達の反応は極めて低調で、ほとんどがだんまりを決め込んだ。政治的に信用が得られない人物は国立大学で重用されないという当時のシステムに照らせば、これもまた当然のこととも言えよう。やはり名門の國立成功大学の馬哲儒学長が、「学長をつとめるのは大変だが、台湾大学の学長ともなるともっと大変だ」という同情を示したのが報じられた程度である。

『聯合報』に紹介された馬学長のコメントによると、國慶閱兵式では各大学の学長も台上で観覧したが、孫学長の姿だけが見えなかった。その後の閱兵式後のパーティーでようやく孫学長を見つけて、なぜ閱兵式に来なかったか聞いたところ、座り込みの処理で徹夜であり非常に忙しかったと答えた。従って、孫学長は非常に苦勞していたと思われるとした。

一方陳清義中興大学学長は、郝柏村院長の意見はもっともだと表明した。

主な舞台となった台湾大学医学部の陳維昭医学部長は、前日夜に100行動聯盟が台

湾大学医学部基礎医学大棟前で座り込みをした時、孫震学長は常に彼と連絡を取り、絶えず状況を把握していたし、様々なルートから関係各所と情報交換し、事態の処理に尽力したと述べた。

陳医学部長によれば、孫学長は学内の学問の自由を守らねばならないのと同時に、この混乱が翌日の閲兵式に及んではいけないという二重の問題に取り組まざるを得ず、ねばり強く対応した。座り込みが最も緊迫した時期には、莊亨岱警政署長ら警察幹部と連絡を取り合っており、職務を蔑ろにしたというのは当たらないとした。陳医学部長の見解では、当日座り込み中の教員や学生にパンを送るべきかどうかというつまらないことで、軍と警察で深刻な対立があり、これに政治勢力も双方に荷担して複雑な事態になっていた上、学外者も運動に参加したことで既に台湾大学だけで決断できる状況ではなくなっていた。自分自身現場で協力して情報収集に動いていたが、一部の人たちから誤解されていると、この問題の難しさを語った。

ことは学問の自由、大学の自治に絡むことであり、『聯合報』は、記事とは別に《新聞眼》というコラムで、陳碧華、林美玲の二人の記者による比較的長い解説記事を示している。そのコラムは「台大的危機、即使校長也無法自救（台湾大学の危機、たとえ学長でも回避できず）、學運方興未艾、最高學府總以火車頭自居陷於漩渦中（学生運動が盛んになり、最高学府は牽引車を任じて渦に巻き込まれる）」と題されたものである。

このコラムでは、「李文忠事件」「蔣介石銅像損壊」「教官退去」から中正紀年堂での3月學運後に到るまで、学生運動は知識人と密に結びつき、教官と学生が共に当局の権威に対抗するという運動の中で、台湾大学はその先頭で機関車役を果たしてきたことをまず指摘、もともと行政機構と非常に近い関係にあった孫震が難しい立場に追い込まれていたとする。

そうは言っても、本来相当に社会で尊重される台湾大学学長にすれば、それほど非難されることはない筈で、今回のように郝柏村行政院長から立法院で公然と非難を受けることは、彼の予測を遥かに超える厳しい反応だったはずだとする。

台大は自由な校風で、学内も公共の事に熱心に参加し、社会もこれまで台湾大の学

長は大変だと見ていた。この難しい時期、学生運動と社会運動の合同行動はほぼ毎年起き、直接「学生や教員の保護」と「社会秩序の維持」という二つの要求に対面しなければならない孫震は、同じく騒動の処理に当たる教育部よりはるかに難役だと同情を示し、台湾大学が学生運動の機関車役をもって自認している使命感は、台湾大学が受け継いできた民主的で自由な校風から発していると、大学の自治にも理解を示す。

当時起こっていた、個人の資質を問う意見に対しては、コラムは、嘗ての蔡元培北京大学学長や同じ台湾大学学長の先輩である傅斯年・銭思亮の名声と比べて孫震の適否を論ずるのは必ずしも公平ではないし、今回のような混乱は社会のうねりと連動している以上一大学学長が社会全体の風潮に棹さすことは難しく、足下の台湾大学の危機すら救えない。この危機は台湾大学学長であれば誰にでも降りかかりうるものであると結んでいる。

### 3.1.3 その後

当時の台湾大学学長孫震は山東省平度県を本籍地とするマクロ経済学者。『聯合報』は、その経歴を簡単に紹介しているが、台湾大学経済系及び大学院を卒業後米国に留学、オクラホマ大学で経済学博士号を取得後母校の助手に迎えられ、講師、助教授を経て民國60年（1971）経済系教授に就任した。民國62年（1973）国の経済建設委員会副座長となり、経済政策にも深く関与、その関係で当時の僑務行政長官や李煥教育部長の後押しがあり、民國73年（1984）に若くして台湾大学学長に就任した。

孫震は非難を受けた翌23日学長辞任の意向を示す。しかしマスコミはじめ世間も彼に同情的で、さすがに郝柏村も、非難の調子を大分おさめた。

26日夜7時、台湾大学の教務部長、訓導部長、総務部長、六学部長、主任秘書、台湾大学病院長を加えた11名のトップ会議を開き、8時半に留任を決定、その後記者会見を開き、経済学で言う「次善の選択」だとしながら、公式に留任を表明した。

孫震は連休前に、連休後出校したら大学の同僚と進退を相談したいとしていた。26日記者会見で、方針転換の理由として、23日に辞表を提出してから、多くの「善意の圧力」を受け、家では毎日電話が鳴りやまず、外出すれば知人や知らない人からも、

早く留任を発表するよう勧められたと述べた。

台湾大学の黄啓方文学院院长，戴東雄法学院院长，陳維昭医学院院长の3名は，孫学長の連日の苦悩に感ずるところがあり，各學院や三長ら行政主管が家族を連れて，学長夫妻を宴席に招いた。孫震は皆を家に招き相談することとし，11名の幹部が学長の家に集まったが，夫人達は同伴しなかった。

その午後孫震は散髪してすっきりした姿で記者会見に現れ，学术界で留任がどう受け止められるかは分からないとしながら，彼はこれまで困難にぶつかるたびに良心に従って無私の選択をしてきたので，友人達も理解してくれると信ずると表明した。<sup>(7)</sup>

この決定を毛高文教育部長も歓迎し，ようやく事態は収束に向かった。

孫震は，結局民國 82 年（1993）まで，すなわちこの事件後 2 年間学長を務め，その後すぐに国防部長（防衛庁長官に相当）に抜擢され，83 年（1994）に国防部長退任後更に 2 年間行政院政務委員を務めるなど，政界，軍事分野でも活躍したが，2000 年度に私立元智大学管理學系に迎えられ極東マクロ經濟の講座を担当する研究生活に戻った。

昨 2006 年秋には，台湾大学と学术交流を考えている大陸の山東大学でも講演を行った。

### 3.2 刑法 100 条問題

ここで言う 100 行動聯盟は，中華民國刑法 100 条という普通内乱罪に関する法律の

(7) 27 日付『聯合報』紙上に掲載された，孫震の文書によるコメントは以下の通り。

「震自十月廿三日請辭台大學長以來，深受社會各界關切，郝柏村院長・毛部長懇切慰留，本校同仁・同學亦責以應以校務發展為念，繼續留任；師長・親友・社會先進紛賜指教，勉以國事為重。

震身受國家栽培，台大教育，感恩之心，無日或忘，不敢以一己之私，負社會厚望。經於十月廿六日邀本校教務・訓導・總務三長，六學院院長（理學院院長在國外），附設醫院院長及主任秘書共商行止，獲一致鼓勵，決定打消辭意，繼續留校服務。

數日來，因震個人去留，引起長官・師友・社會各界不安與關切，震內心至感歉疚，敬申感激之忱。今後願與本校同仁并肩携手・恪遵本校“敦品勵學・愛國愛人”之校訓，加倍努力，為國育才，殷望長官・師友・各界賢達續予督導愛護；並盼本校同仁精研學術，各位同學專心向學，俾不負社會之期許。

孫震 民國八十年十月二十六日

廃止運動である。これは憲法変更を含む非合法な手段による国体の破壊、国家転覆を企図したり準備したりする罪を普通内乱罪と規定したものである。国家転覆を計画することは、日本を含む多くの国家で当然死刑もしくはそれに近い重罪と規定していることから、この条文の精神は、客観的にそう大きな問題とは考えられない。にもかかわらず、当時の台湾でこの条文廃止を巡る深刻な対立が生じたのは、台湾独立（所謂「台独」）運動がこの条文を根拠に取り締まられてきたからである。「台独」はここ10年近くは中国政府の反応を巻き込んで、初期と些か性格を変えてとらえられることもあるが、本来は台湾の中華民国からの独立を標榜していたのであり、独立元の中華民国が既に台湾本島とほとんどその支配権の及ぶ範囲が同一になってしまっていた当時であっては、確かに国家転覆とほぼ同じ意味を持つという理屈が当てはまらなくもない。

ただ、どの段階でこれが処罰対象になるか、例えば実際の行動に出なくとも、著書で考えを表明したり、演説したりすることも「国家転覆を陰謀」することになるのかは条文では明示されていなかった。

支持者に少なからぬ「台独」勢力を抱える民進党にすれば、実際に武装して暴動を起こすことで初めて罪は明確になるとしたいので、このように比較的自由な運用を許す条文は廃止したいのだが、与党側としては、これをなるべく広くとらえていざというときに対処が遅れるようなことはしたくない。政府の法務部は幾つかの修正案を示していたが、野党側は同意しなかった。

既にこの民国80年4月には、「動員戡乱時期臨時條款」が廃止されていたが、この時点では刑法100条は生き残っており、5月9日の時点で清華大学の台独派学生陳正然らが、これもまだ残っていた「懲治叛乱條例」に基づき、法務部調査局により逮捕された。陳正然らの逮捕後、学園では教員や学生によるストライキや座り込みが起り、5月12日には中正紀年堂前の座り込み、そして5月20日に「懲治叛乱條例」と刑法100条廃止を求めるデモを行うことの呼びかけが行われた。この逮捕は、当局の予想を超える反発を大衆の間に招き、この責任を取る形で、調査局副局長が辞意を表明する騒ぎになった。

学生達は5月17日に高等法院檢察署により起訴されるが、同日立法院は同條例廢

止を提案した。このように、「動員戡乱時期臨時條款」廃止にともない憲法主体の体制に戻ることが確定する一方、取り締まり手段の緩化が治安当局の懸念により直ちに進まないというアンバランスが、この年の台湾社会を相当不安定な状態に陥れていた。確かにこの年4月以降の動きは民主化を目指しているのは明らかだとしても、平行するように金門島・馬祖島での臨時戒嚴令施行など、明らかにその流れに抵抗する動きも見られ、上記学生の逮捕も、民主化への一つの脅迫のように受け取られた。<sup>(8)</sup>

さて、「懲治叛乱條例」廃止後は、民主化運動の標的は刑法100条に絞られ、運動は更に先鋭化していった。こうした中、9月21日に李鎮源、林山田、陳師孟ら「台湾教授協會」メンバーが主体となって「100行動聯盟」が組織され、10月10日の運動を計画するに至ったのである。

こうした膠着状態の中で、この年9月21日生まれたのが100行動聯盟である。その中心は当時の台湾大学経済系教授、陳布雷の孫の陳師孟で、10月10日双十(國慶)節に行われる閱兵式に重ねて運動を盛り上げようとした。そして民進党や台湾建国運動組織もこの運動に合流した。

9月24日には立法院にデモ隊が動員され、立法院では嚴重な警備下で審議が行われた。

そしてその審議では遂に殴り合いまで起こり警官を導入する騒ぎになったが、与党側は譲歩は条文修正までという姿勢に終始した。この運動は閱兵式を狙って過激化する恐れがあったので、梁肅戎立法院長は、閱兵式中止まで提案した。李登輝總統の決定で、行政院刑法100条研修小組を超党派で組織することで沈静化を図ることとなって、9月29日、李登輝は有力者11名と会談し解決に向けて動き、施啓揚行政院副院長と馬英九も野党側と接触した。

10月6日朝に馬英九、宋楚瑜、洪玉鉞が、100行動聯盟メンバーと協議に入り、非暴力的な政治主張を内乱罪に含めないことと武力による暴動が内乱罪対象と明示した条文を作ることを落としどころに国民党内の調整に入ったが、なかなかまとまらな

---

(8) 戒嚴令は既に民國76(1987)年に解除されていたが、中国と近接する金門・馬祖地区に関しては、中国がなお武力侵攻の姿勢を緩めていないという理由で、郝柏村行政院長が地区限定の臨時戒嚴令施行を図った。(5月9日部会工作への指示など)

かった。それでも10月7日刑法100条の廃止と、101条、102条修正が立法院司法委員会を通過した。

これによって、反閱兵運動は、当初の街頭での当局との直接対決戦術を、座り込みにダウンすることになった。この結果10月10日に300名が台湾大学の医学院大楼前で座り込み、やがて大量の軍人や警官に排除され、この騒動は一段落した。この反閱兵運動に関しては、だから、閱兵式後に起こった台湾大学学長辞任騒ぎの方が大事件だったとも見えるのである。

結局「懲治叛乱條例」廃止のほぼ1年後、民國82(1993)年5月16日に刑法100条は、国家転覆の陰謀に関する部分を削除する形に修正された。

長く台湾を支配していた治安維持体制を解体再構築するにはそれなりの時間もかかったし、混乱もその過程では不可避のものだったと言える。ともあれ、刑法100条の修正は、同年の黒名單(ブラックリスト)解除とともに、民主化の一応の完成と見なせる。勿論これ以後も総統直接選挙など行われた施策は少なくないが、議会制民主主義というものを実行する地盤はこれで確立されたのである。

民國82年の台湾人権白書は、台湾に所謂政治犯が存在しないと明記したが、このことは、これ以後、台湾の国際的地位を認識させるのに力があつた。Freedom Houseの人権報告では、台湾は、1997年に、中国が人権の最も無視される国々に分類されるのを後目に、国民が完全に自由な環境にある国家のグループに分類されたのである。

(接)